



講前の仏具磨き 2024年11月11日(月)

光といのち

第156号
一報恩講一
2025年11月1日発行

発行所
真宗大谷派勝善寺
〒299-2214
千葉県南房総市二部1344-2
電話 0470-57-2657
FAX 0470-57-2290
Eメール info@syozenji.or.jp
住職 釋孝昌(井上孝昌)

報恩講

すべから
須く仏号を
しょう
称して師恩
と報ずべし。

速夜

十一月十四日(金)
十五時〜十六時
法話 住職

晨朝

十一月十五日(土)
六時〜六時四十分
法話 副住職

日中

十一月十五日(土)
九時三十分〜十二時
感話 大沢信行氏
法話港区了善寺住職
百々海 眞師
講題「現生の利益」

報恩講は、どうし
てもお参りください。

衣食住が満たされ、健康で
長生きし、最後まで自分らし
く生きたい。できればPPK
(ピンピンコロリ)と死にた
いと、欲の多い私ですが、こ
のころは身体の故障が気にな
ったりすると、老いを感じ一
人で死んでいく不安が過るこ
ともあります。

そんな私を落ち着かせる大
地が、親鸞聖人の歩んだ浄土
真宗です。その御恩に報いる
親鸞聖人の法要を、一緒にお
勤めいたしましょう。

題字下の言葉は、親鸞聖人
三十三回忌法要に覚如上人が
作られた『報恩講私記(式文)』
にあります。

「須」は、漢文では「すべ
からく・・・すべし」と再読
し、強い義務を表す文字です。

「報恩講では、どうしても
南無阿弥陀仏と称えて、親鸞
聖人のご恩に報いなければな

らない」との、覚如上人の仰
せです。

左の和讃は、親鸞聖人がお
作りになりました。「恩徳讃」
と呼ばれ聞法会などに歌いま
すよね。報恩講日中にお勤め
する六首の結びの和讃です。

によらいだいひ おんどく

如来大悲の恩徳は

みこ

身を粉にしても報ずべし

ししゅちしき おんどく

師主知識の恩徳も

ほねをくだきても謝すべし

「如来大悲」は、阿弥陀如
来(仏)の無条件の救い。「師
主知識」は、法然上人と七高
僧(龍樹菩薩・天親菩薩・曇
鸞大師・道綽禅师・源信僧
都)など親鸞聖人に「如来大
悲」の救いを伝えた方々です。
「師主」は、私たちが歌つ
たりお勤めで称える時は、も
ちろん親鸞聖人です。

欲ふかき人の心と降る雪は
つもりつもりてわれを忘れる



仏教徒が帰依し供養せねばならぬ
仏宝・法宝・僧宝を三宝と言いま
す。さとした人とさとの法とさと
りの法をめざす人々の集いのこと
です。「僧」は、僧侶ではありません。
さとの法をめざす人々の集い、
「僧伽^{さんが}」のことです。

これは、仏法を聴聞し語り合い、さ
との法に照らされ日常を生きる私
たち真宗門徒を論じた書です。

世俗的な価値観に埋没し出世間
(仏教)の価値観を失った私たち真宗
門徒が、その回復のために自覚しな
ければならない内容が、ここに記さ
れていました。

二〇〇八年六月八日、東京の秋葉原で
通称「秋葉原通り魔事件」が起こりまし
た。犯人はトラックで歩行者天国に侵入
し、次々と歩行者をはね、その後、犯人
は多数の歩行者を刃物で殺傷しました。
七人の方が死亡し、十人の方が負傷しま
した。この事件を引き起こした青年は、
「勝ち組はみんな死ねばいい」と言った
そうです。

この事件は、世俗的な価値観を優先し
て、人間として守るべきものを見失って
いる、あるいは見誤っていることを端的
に示す事件です。確かに社会は人間の道
徳等の世俗的な価値観によって、形成さ
れていくわけですから、世俗的な価値観
は大切であると思います。しかし、その
ような世俗の価値観を超えた、出世間の
価値観にふれることがなければ、はなは
だしく迷うという現実があるのです。と
言うのも、世俗的な価値観は、相対的な
価値観であるからです。

現代は格差社会であり、勝ち組や負け
組という価値観があります。しかしその
価値観は、時代によって変貌していくわ

けです。つまり私たちはそれぞれの時代
における価値観に振り回されているので
す。そのようなことから私たちは、世俗
の価値観を超えた者にならなければなら
ないと思うのです。以前私は、次のよう
に書いたことがあります。

私たちのこの身は世俗の中にあるけ
れども、世俗を超えたものに眼を開
かないと、どうしても世俗の価値観
の中に縛られてしまう。つまり、人
間的な物差しだとか、自己だとか、
そういったものを中心に生きてしま
うことになります。それはさまざま
な意味で人間のひずみだとか、社会
のひずみだとか、そういうものをい
ろいろ生み出しているのではないか
と思います。いわば本尊、本心に尊
いことを見失ってしまったというこ
とが、現代の大きな特徴ですね。
(安信哉『帰依三宝―仏教徒の大
切なよりどころ―』東本願寺出版、
九―一〇頁)

現代は世俗の価値が前面に出過ぎてし
まい、宗教的な価値を見失っています。
それによって人間としての様々な問題が

出てきています。

私たち真宗門徒は、日常の生活の中で「正信偈」や『御文』を拝読させていだいていくわけですが、それは「正信偈」や『御文』をとおして、世俗的な物の見方と異なる、もう一つの仏教による物の見方を学んでいくということなのです。そのような意味においても、「正信偈」を大切なお聖教として拝読したいと思っています。また『蓮如上人御一代記聞書』は「真宗論語」とも言われており、大切なお聖教です。『論語』とは孔子の言行集であり、特に封建時代、武士に親しまれた一つの手本ですが、武士にとって自らを映し出す鏡のような書物だったのでしょう。そのような意味で『蓮如上人御一代記聞書』が「真宗論語」と呼ばれたと伝えられています。

世俗的な価値観を依り処として生きるということとは、例えばお金や名誉や社会的な地位等を本尊とするわけです。しかしそうではなく、私たちは仏の教えを本尊とするというようなことです。私の上に正信念仏が成り立つ時、世俗的な価値から出世間の価値へ、つまり相対的価値

から絶対的価値へと転ぜられるのです。ここに人生の方向が出てくるわけです。それは念仏の智慧による生き方なのです。人知では領けられないかもしれません。しかし私たちは人知だけではどうにもならないのであり、仏智に照らされて生きていくのです。つまり人知と仏智の二つの中で生活していくのです。『御文』では「末代無智」（真宗聖典八三二頁）と言うように、私たちは末代無智の凡夫であるという一点に立ち、この娑婆を生き抜いていくのです。それが其の生き方であると思います。人生の方向が世俗から宗教へと転ずるのです。

世俗から宗教へと転じていくことを、一般的には回心かいしんと言います。キリスト教も回心かいしんと言いますし、仏教では回心えしんと呼びます。

それでは、真宗においてその回心とはどのようなことでしょうか。親鸞聖人は『唯信鈔文意』において「回心」というのは、自力の心をひるがえし、すつるをいうなり」（真宗聖典五五二頁）と説かれています。さらに親鸞聖人ご自身の回

心については、『教行信証』「後序」において「しかるに愚禿釈の鸞、建仁辛の酉の暦、雑行を棄てて本願に帰す」（真宗聖此三九九頁）と述べておられます。

その回心とは、具体的には本願に帰するということです。誓えて言えば、今まで根無し草のような状態にあった自分が、初めて本願という大地に根をおろしたのです。もっと具体的に言えば、念仏を申す者になるということです。

親鸞聖人ご自身は、比叡山の天台宗で修行されて、その修行の一切を放擲して、法然上人のもとへ行きました。心が翻るだけでなくて、身が翻ったのです。つまり回心とは轉身のことなのです。それは一つの抽象的な理論が、抽象的な別の理論に変わったということではないのです。本当に自分が立つべき大地に根をおろすということです。さらに言えば、一緒に念仏申す者と共に歩みだすということでもあります。

念仏申し、『正信偈』を勤め、仏法を聴聞し語り合う。これが、出世间（仏教）の価値観に触れることです。

世話人総会

10月19日(日) 13:30~15:30



当番地区世話人足達崇総代が議長となり報恩講の役割分担などを決めました。

一 報恩講をお勤めする目的

真宗門徒（勝善寺の檀家）である私たち一人ひとりが、親鸞聖人が歩んだ浄土真宗を確認し人生を再出発する。

二 「親鸞聖人が歩んだ浄土真宗」は

現実、「今・ここ」に立ち歩む人生を説く教えです。

三 その方法は

「南無阿弥陀仏」と念仏を称える。

仏法聴聞（仏の教えを聴き頷くこと）をする。

四 「南無阿弥陀仏」の無い人生は

後悔と取り越し苦労をして、「今」が無い人生。

不安に怯え迷信に惑う、「ここ」（立脚地）が無い人生。
世間体や他人の顔色を伺う、真の主体性が無い人生。
老病死する人生を空しく過ごす、真の満足が無い人生。

五 私にとっての親鸞聖人の「恩」は

「他人とくらべず あせらず あきらめず」人生を生きる智慧（「南無阿弥陀仏」を教えられたこと。すべに「今・ここ」を忘れてしまう私が、念仏によりそこに帰帰できる